

教育講演「新型コロナウイルス感染症～抗体検査からみたパンデミック」

◎田中 純子<sup>1)</sup>

広島大学 大学院医系科学研究科 疫学・疾病制御学 教授 広島大学 理事・副学長<sup>1)</sup>

要約

新型コロナウイルス感染症は、発生から2年以上経過したものの、変異株の出現や2022年夏から第7波が始まるなど、未だ収束には至っておらず、引き続き感染状況の実態解明や予防接種、治療の改良・開発、感染制御のための政策研究が重要である。広島県・広島大学では、2020年に全国に先駆けた新たな取り組みとして、自治体および感染症指定医療機関との連携に基づく地域のCOVID-19研究を開始した（官学連携による検査研究体制構築事業）。

当事業では、10の研究課題（【N1】～【N10】）を立てて、COVID-19患者集団（【N5】 【N7】）だけでなく、無作為抽出した一般集団（【N4】）、一般の大学生・教職員集団（【N3】）、ハイリスク集団（医療・介護従事者【N1】 【N9】 【N10】）等も対象とした疫学・臨床医学・ウイルス学の視点から研究を実施している。

令和3年度にはAMED研究事業「広島県官学連携COVID-19研究体制を基盤とした疫学・臨床医学・ウイルス学・医療システム学の視点から新たなエビデンス創出を目指す発展的研究」が、令和4年度にはAMED研究事業「官学連携COVID-19研究体制を基盤とした、新たな感染症流行に対する危機管理も見据えたサーベイランス・疫学研究」採択され、行政と医療機関、アカデミックの連携が継続されている。

本講演では、これまでに我々の研究チームが行ってきた研究の成果の中から、いくつかの話題を取り上げる。